

今月の一言 静かなブームを呼ぶ映画「An Inconvenient Truth / 不都合な真実」。環境問題の本質をついたうまいタイトルですね。映画館は学生やカップルが目立ち、若者の環境意識の高さにビックリ。きっと現代社会の「A Convenient Untruth / 都合のよい偽り」に気づいているのでしょうか。(大高 一博)

Topics

- 山村上席研究員が東京工業大学梅干野教授との共同研究で、手島工業財団の「手島記念研究賞(発明賞)」を受賞いたしました(2月28日)。
- 安日建設計副社長、弊社の石川上席研究員、吉田主任研究員他が韓国ソウル市・呉世勲(オ・セフン)市長を表敬訪問いたしました(3月9日)。ソウル市側は関係する局長等も含め10数名が参加され、たいへん意義深い訪問となりました。

「コンパクトシティ」とは?

市街地の郊外拡散抑制と中心市街地への商業・居住機能等の集約促進を柱とした「まちづくり三法」の見直しが行われたこともあり、「コンパクトシティ」は「中心市街地活性化」と並び、まちづくりの「流行語大賞」といった感がある。

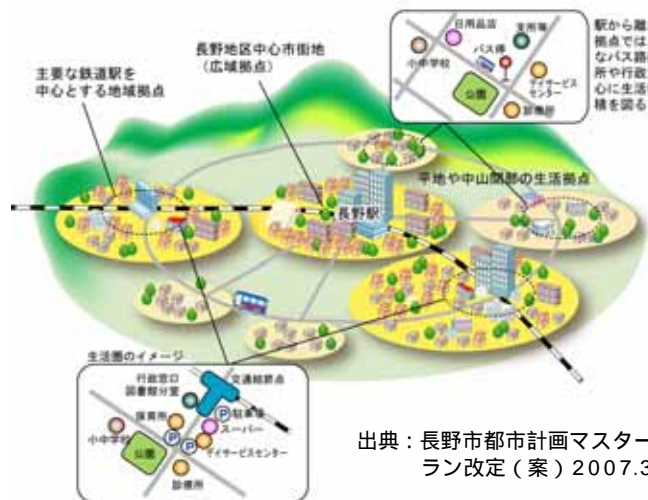
コンパクトという言葉は、一般的に「密集した、無駄なスペースがないこぢんまりした」といった意味で使われている。では、コンパクトシティとは何か。

コンパクトシティは、持続可能な都市づくりの空間形態としてEU諸国で使われ始めたといわれている。「持続可能」という言葉の定義や概念が人によって異なるのと同様に、コンパクトシティも便利な言葉ではあるが、あいまいで人により解釈が異なるのが実情ではないだろうか。

コンパクトシティの狙いは、都市により異なる。例えば、欧州では、都市の環境負荷の低減、とくに自動車からのCO₂排出削減を主な狙いとしている。アメリカでは、伝統的なコミュニティ形成や建物デザインに価値を置くニューアーバニズムや、スマートグロースといった成長管理・政策形成システムの中でコンパクトシティの形成を目指している。爆発的な都市化が進む中国や東南アジアの都市においては、コンパクトシティもこれらとは異なったものになる。

わが国でも、地方都市と大都市圏では、「コンパクト」の意味するところや対象とする範囲は異なってくる。地方都市では、中心市街地の衰退、市街地の郊外化による弊害(車利用増加、郊外化に伴う基盤整備や維持管理コストの増大等)という問題を抱え、高齢化と人口減少を背景として、コンパクトシティを目指す都市が増えている。ただし、何を目的として、どのように取り組むかは自治体によって異なっている。雪の多い青森市では、郊外化による除雪費用の財政負担増がコンパクトシティを目指す理由の一つとなっている。

筆者がお手伝いした、長野市都市計画マスタープランでは、市街地の郊外拡大を抑制し、主要な駅等を中心とする拠点や中山間地における集約的な生活拠点の形成と連携による都市づくりを目標としている(下図)。コンパクトな生活圏を実現するために、公共交通の充実による拠点間の連携強化や、郊外の自然環境の保全、美しい景観の維持のための土地利用の誘導など総合的な都市づくりの考え方を軸としている。この都市像の実現化方策の一つとして、中心市街地では、駅から善光寺にいたる中央通りの歩行者優先道路化(トランジット・モール化)を目指している。市では中心市街地活性化基本計画の見直しも進められており、この歩行者優先道路化が目玉となっている。



出典：長野市都市計画マスタープラン改定(案)2007.3.

わが国で人口減少・超高齢社会が現実的な問題となった現在、都市や環境分野の計画づくりにはコンパクトシティの議論は避けて通れない。その際には、それぞれが思い描く「コンパクト」というイメージに引きずられることなく、地域の特性を踏まえた都市像や空間構造等について合意した上で、それを追求するための具体的な議論が重要と考える。(竹村 登)

定期配信をご希望の方

定期配信を御希望の方は、下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

(chihiro.kimura@nikken.co.jp 担当: 木村千博)

編集後記

コンパクトシティというのは「こうあるべき」ではなく、まちの状況に合わせて「こうでもいい、ああでもいい」ということがわかり、認識を新たにしました。(K)